

『看護教育のためのパフォーマンス評価
ループリック作成からカリキュラム設計へ』ループリック活用に挑む
教員仲間を励ましてくれる
待望の書著：糸賀暢子，元田貴子，西岡加名恵／定価：本体 2,700 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657

まさに待望の 1 冊である。本書では、ループリックを道標とし、自律的に看護を学び、看護ができる学生を育てる教育をめざすパフォーマンス評価と、それに有効な逆向き設計論にもとづくカリキュラム設計について、授業や実習の科目単位としてのミクロな設計面と、カリキュラム全体としてのマクロな設計面が非常にわかりやすく具体的に紹介されている。しかし、単なる方法論の紹介にはとどまらない。本書の素晴らしさは、随所に散りばめられた著者たちの現場であるあじさい看護福祉専門学校の教育実践の軌跡から発せられるメッセージ性に依る。そして、それは学生自身が看護の専門性を価値づけられるよう導き、確かな実践力を身につけてきた実績、経験を土台に語られているからこそ、納得のいく重みがある。

1 ページ 1 ページを読み進めていながら、同校主催のプロジェクト学習研修に参加した際に感じた衝撃を思い出した。学生自らが学習を切り拓いている様子を目の当たりにし、学校を挙げて自律した学生を育てる教育実践がなされていることへの羨ましさと同時に、自校の教育実践が思うに至っていない悔しさを記憶している。あれから 10 年。以前にも増して、より一貫性をもったカリキュラムへと進化していることに感服する。看護基礎教育として本来のあるべき方向に向かい、カリキュラムの再構築にチャレンジし続けた教育

実践の集大成としての 1 冊だといえる。最近では、雑誌などでさまざまなループリックが散見されるが、本書で示されるループリックがそれらと異なるのは、学生の学習活動および学習活動における具体的な評価規準を示している点である。学生の実践をともなう学習活動に指導の軸をおくことで、学生がループリックを活用し、自ら探求し学ぶ力を身につけることを主眼としている。

パフォーマンス評価がめざすものは、その場の状況に応じて、目の前にいる患者のために自分ができる最善の方法は何かをよく考えて選択し、それを患者(家族)の視点で実践できる学生を育てるためのカリキュラムの一貫性である。そのために、「重点目標」を「本質的な問い」へと転換し、さらに「永続的理解」につなげて、学生がめざすゴールがブレないようにすることが重要だと記されているが、これが意外と難しい。当校も、臨地実習でのループリック活用を始めたばかりで、その検討過程では、教員自身の教育や看護に対する理解の様相が浮き彫りになった。「重点目標」と「本質的な問い」が混同し、行きつ戻りつしながら、教員たちの思考は随分と鍛えられた。患者が望む最善の看護を自ら考えて実践できる学生を育てるためには、教員もまた最善を尽くさなければならない。

一步踏み出さなければ現状は変わらない。読み終えたとき、ポンっと背中を押された気がした。